

避難所内部 (名取市高館小学校体育館)



4月12日から15日まで、秋田県避難所支援チームの第5クルとして宮城県名取市の避難所運営支援を行いながら、由利本荘市の職員と2人で4日間、避難者と同じ生活を送ってきました。担当した高館小学校避難所は、閑上(ゆりあげ)地区の住民126名(男58名、女68名)が避難生活をしていました。同地区は海岸に近いため、ほとんどの方が家を流され、家族を亡くした方もいました。126名もの人間が体育館で生活しているのですが、6班に編成されて食事・清掃・生活係など、役割を分担

宮城県名取市への避難所運営支援

して避難所が運営されていました。避難所の一日の生活サイクルは次のとおりです。

- 6時 起床
- 7時 朝食(市の提供と食事係が作ったみそ汁など)
- 8時30分 ラジオ体操
- 8時40分 清掃・換気
- 10時 物資搬入
- 12時 昼食(火、金、土、日はサッポロビール園の炊き出しが有り、他は自前)
- 16時 夕食と翌日の朝食搬入
- 18時 夕食(市の提供、炊き出しもたまに有る)
- 19時 リーダー会議
- 21時30分 消灯

すでに震災から1カ月が過ぎ、避難者たちは落ち着いているように見えました。当初はいろいろな問題があったと聞きました。問題があればリーダー会議で議論して、一つ一つ解決し、現在のコミュニティが出来上がったようです。行政ではなく、避難者自らが働くことで、避難所の運営が円滑に進んでいるようです。

し、シャワー設備など、生活の支障は少なく思えました。それでも、市から提供される食事は偏りがあり、栄養バランスは良くないと感じました。その後朝夕の食事は弁当が出るようになったと聞いたので、若干改善されたようです。物資量は十分にあるように見えました。食料のバランスが悪く、不足している物は数多く見られました。避難所には子どもたちが20人ほどいました。震災のショックを受けていることは表面的には感じられませんが、幼い心には忘れることのできない光景が焼き付いていることでしょ

ある日の朝食(パン、みそ汁)



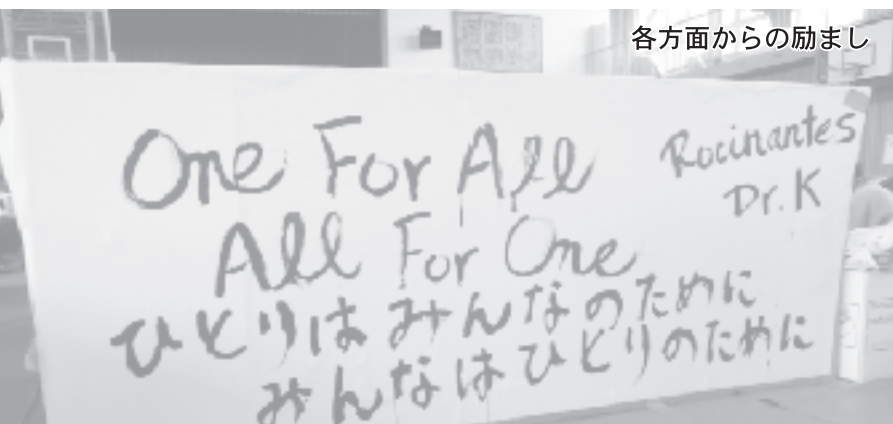
ある日の夕食(おにぎり、水、カップラーメン)



総務部総務課所属職員報告

う。精神的な支えが必要と思えました。彼ら、彼女らの将来が明るいものとなるよう願っています。報道でしか知ることができない現状を体験できたことは、貴重な経験であり、被災者に何が必要なのか少し理解できたように思えました。震災前の生活は、完全には取り戻せないかもしれませんが、一日も早い復興を願っています。

各方面からの励まし



被災地支援レポート

宮城県名取市の平野部



秋田県では、東日本大震災の被災地支援として、県職員・市町村職員を、被災した自治体に派遣しています。にかほ市の職員も宮城県、岩手県で避難所の運営補助や健康相談、家屋被害調査などを行っています。その活動や被災地の状況を報告します。

一方、被災地で炊き出しを行ったり、ボランティアとして作業を行ったりする、市民レベルの活動も報告されるようになってきました。広報広聴班に情報提供があった報告の中から、いくつかをご紹介します。

企画情報課広報広聴班

☎43・7510

にかほ市への避難者は27世帯 69名 (5月9日現在・届出分)

宮城県松島町への家屋被害調査支援

松島町の家屋被害調査は、千件を超える「り災証明書」発行申請に対応するために、地震や津波による家屋被害を「全壊」「半壊」などの区分で認定するもので、4月11日から3週間、にかほ市職員延べ6人が同町職員とともに現地調査と認定作業にあたりました。

松島湾沿いに位置する同町では、家屋をのみ込むほどの津波被害はなかったものの、観光地として有名な松島地区や、堤防が決壊した手樽地区などでは、床上浸水による泥やがれきの流入被害が多く見られました。

いわゆる「新耐震基準」施行(昭和56年)前に建築された家屋ほど、地震による被害は大きく、老朽家屋の倒壊も見られました。調査したほとんどの家屋で外壁に亀裂が入り、地盤の沈下・崩落により建物全体が傾いたり、基礎や屋根が著しく破損した家屋も目立ちました。

町の人々は、沿岸の他市町に比べて被害が小さかったと認識しており、不便な生活を受け入

傾きなどを調査する家屋被害調査



れ、前向きに今後の生活設計を考えている姿が印象的でした。また、ヘルメットの「にかほ市」の文字を見て、感謝の言葉をかけてくださる方も多く、夫婦町の絆を感じました。すでに復興の途にある松島町では、各種支援制度の適用の判断材料となる「り災証明書」への関心は高く、行政がこれを速やかに発行することが町民の生活支援に直結することを改めて認識しました。

福祉事務所福祉課所属職員報告